

音楽ファンのコンサート参加行動による 精神的健康度への影響

—参加頻度による検討—

目白大学大学院心理学研究科 西川千登世
目白大学社会学部 渋谷 昌三

【要 約】

本研究の目的は、ファンがコンサートを観に行くこと（参加）によって精神健康度にどのような影響を与えるのかを検証することである。参加者・不参加者の差異、また、3時点で調査を実施することで持続効果について検証する。さらに、参加頻度の影響についても検討する。3時点の全てに回答した被験者は86名（参加者群52名、不参加者群34名）であった。結果、参加者群の精神的健康度の変化量に有意差がみられ、コンサートを観に行くことで精神的健康度が改善されることが明らかになった。しかしながら、持続効果については、参加・不参加の影響は確認できなかった。一方、参加頻度について検討を行った結果、1日のみ参加者群に持続効果がみられた。今後は、参加頻度で差異があった要因を検討するとともに、スポーツファン等も含め、他のファンの対象や余暇活動へと調査対象を広げて検証する必要性、また、ファンは、一時点の事象に過ぎないコンサートだけではなく、ファンの活動として日常的に時間や労力を費やしていると考えられ、ファンであることが生活全体へもたらす効果や心理的well-beingへの影響の全体的検討が必要だと考える。

キーワード：ファン、精神的健康度、余暇活動、コンサート、自由裁量時間

問題と目的

「ファン」とは、オックスフォード英語大辞典によると、十九世紀のはじめ頃から「fanatic」の略語として使用され始め、ラテン語の「fānāticus」、神殿における敬虔な態度、神に正対する一種の宗教的な態度を表す言葉を語源としている。この語源から見たファン概念は自己とは絶対的な距離をとる他者、共在するということが本来不可能であるような他者と、関係を取り結ぶその様を指し示すものであったと考えられている（松田、1997）。しかしながら、わが国におけるファンの概念は、南（1957）が「人気の受け手」というように、宗教色は見られず、「熱狂的な愛好者」という意味を持ち、ある対象に対して特別な思い入れのある人々のこと

である。ファンの行動をファンの度合いで分類した文献は見当たらないが、ファンを行動からみてみると、①流行、②評価、③参加、④働きかけ、⑤生活に分けることができ、挙げた順にファンの度合いは高くなっていくと考えられる。①流行とは、ファンの入り口ともいえ、自宅等において観覧・観戦をするファンであり、まだ周囲に左右されやすい。②評価とは、ファンの対象を評価し、好意を持つ、あるいは自分に合うと評価すれば自らCDや雑誌等を購入するといった行動をする。③参加とは、コンサートや試合の会場に足を運び、「生」で観る、直接応援するといった自分自身がその場所・時間に参加するファンである。④働きかけとは、ファンレターを書く、情報を収集する、ファン同士

のコミュニティをつくる等、ファンの対象に近くなれるよう働きかけを行う。最後の⑤生活とは、生活自体がファンであることを中心に組み立てられ、4年に一度のサッカーのワールドカップを観戦するために仕事をやめてしまう、あるいはコンサートツアーの日程に合わせて出産計画を立てるといった行動をするファンもいる。また、ファンの行動の一つに消費行動があるが、原田（2002）は、スポーツファンを対象にしているものの、その特徴として、物品の購入やスポーツ観戦といった消費場所での活動だけでなく、その前の「期待」や「準備」、そしてその活動の後の「評価」や「追想」といった長時間に亘る消費活動を含んでいると述べている。音楽ファンであれば、曲を知るためのCDの購入に始まり、コンサートチケットの購入や遠征旅行の手配、コンサートを観た後は、ファン同士で集まり語り合い、コンサートのDVDが発売されれば購入し、また観るということであろう。ファンの心理の研究としては、その構造や特性といった研究があるが、ファンであることが心理的に及ぼす影響についての研究はほとんどない。その理由として、松井（2002）は、対象となる現象の時間幅の狭さをあげている。つまり、ファン現象は一時的なものであり、研究発表するまでに終息してしまう可能性を示唆している。さらに、先行研究においては、調査対象者のほとんどが大学生であるため、ファンとしてまだ定着しておらず、流行現象に近い部分があるだろう。しかしながら、ファン歴の長い定着したファンもおり、ファンである良さやファンを続けていく意味というものがあるのでないだろうか。

一方、ファンの活動は余暇活動の一つと捉えることもできる。余暇活動とは、広義には文字通り「余った暇」であり、自分の自由にできる時間における活動であるが、狭義には活動に積極性を持つ欧米的なレジャー、つまり、自分の好きなこと、興味関心のあることをする活動である（瀬沼, 2005）。余暇時間の過ごし方は様々であるが、余暇活動における潜在需要（参加希望率－参加率）の調査では、「海外旅行（33.4%）」「国内旅行（18.7%）」について「音楽会・コンサートに行く（11.8%）」が第3位であり、

観光・行楽部門が上位10種目の中で5種目を占めている中で、現在の参加率を考慮すると「音楽会・コンサート」が身近な余暇活動として親しまれていることがわかる（社会経済生産性本部, 2005）。Searle&Brayley（1993）は、余暇活動（レジャー）は、子どもから高齢者まで年齢を問わず、娯乐的、文化的、伝統的な活動として個人のQOLを高める効果的な方法であり、健康なライフスタイルと活動を促進する重要な手段として選択されるようになったと述べている。また、Hull（1991）は、レジャー活動は前向きな気分を高めることによって健康やwell-beingに影響を与えることを明らかにしており、人は、楽しい・嬉しい経験をレジャーに求めることで、比較的短時間で一過性の経験にもかかわらず、現時点でのQOLを高めるだけでなく、累積的に生活に趣を添え、長期にわたる心理的well-beingも高めることを示唆している。わが国における余暇活動研究としては身体的健康やQOLとの関連を扱ったものが多く、心理学的なレジャー研究は少ないが、川口・豊増・吉田・鶴川・植本（2002）では、余暇の充実度が精神的健康と関連があることが示されており、余暇活動が心身の健康を保つための一助となっていると考えられる。

本研究の目的は、1）ファンがコンサートを観に行くことによって精神健康度にどのような影響を与えるのかを検証することである。また、Hullが示唆しているように2）一過性の経験でも持続効果があるのかどうかについても検証する。1）については、参加者群と不参加者群の比較を行い、2）については、調査をコンサート前後を含め3時点で実施することで検証を行う。

なお、コンサートを観に行くという行動は、本研究の対象であるファンにとって単なる鑑賞ではなく、時間・空間を共有できる場への参加という行動となるため、コンサートへの参加・不参加という表現を用いた。

方法

調査対象者

本研究では、芸能活動歴22年であり、ファンが定着していると考えられる吉川晃司ファンを

対象とした。調査対象者については、ファンクラブのオフィシャルホームページ及びファンが運営しているアンオフィシャルホームページの掲示板を利用しての募集とファンである知人を通じてスノーボールサンプリングで調査の依頼を行った。

第一調査の回答者242名（男性：66名，女性：176名，平均年齢34.73歳（ $SD = 5.19$ ）から，その後3回のパネル調査回答者を募集した。第1回目の調査回答者は106名（男性：28名，女性：78名，平均年齢35.51歳（ $SD = 4.13$ ）），第2回目の調査回答者は94名（男性：23名，女性：71名，平均年齢35.45歳（ $SD = 4.26$ ）），第3回目までの全パネル調査回答者は86名（男性：19名，女性：67名，平均年齢35.4歳（ $SD = 4.26$ ）），平均ファン暦18.7年（ $SD = 4.89$ ）であった。

なお，全パネル調査回答者の内，コンサートに行った人（参加者）は52名（男性：8名，女性：44名），コンサートに行かなかった人（不参加者）は34名（男性：11名，女性23名）であった。

調査時期

第一調査：2005年12月上旬

パネル調査：コンサートが2005年12月29日および30日に行われ，コンサートの約3週間前（第1回目）とコンサート直後（第2回目），コンサート約3週間後（第3回目），それぞれ3日間程度の期間で調査を実施した¹⁾。

調査の手続きおよび倫理的配慮

コンサートの日程に合わせて限定された期間内に回答する必要があったことから，Webを用いて質問紙調査を実施した。掲示板に第一調査用のURLをリンクさせてもらい，そこから調査用のホームページに移動するようにした。第一調査では，質問項目への回答とともに，パネル調査に協力しても良いという方にはメールアドレスの記入を依頼した。回答時期前に調査用URLの添付されたメールにて通知をし，第1回目から第3回目の3時点において回答してもらった。また，倫理的配慮として，調査への参加は自由意志であること，無記名であることにより匿名性は守られること，得られたデータは研究以外に用いないこと，また，メールアドレス

については厳重な管理と調査終了後にはデータを削除すること等，倫理事項について全ての調査実施時の最初の画面で提示した。

調査内容

第一調査

①ファン度尺度：ファンの度合いを測定する尺度の作成のため，松井（2002），小城（2002，2004）を参考にするとともに，ファンへのインタビューを行い，検討を加えて37項目を作成した。

②パーソナリティ特性：伊藤（1995）の社会志向性・個人志向性PN尺度30項目，坂本（1993）の没入尺度19項目について回答してもらった。

なお，第一調査は，その後のパネル調査の協力者の募集を実施するためとファンの特性について検討するために実施した。

パネル調査

③精神的健康度

精神的健康度を測定する尺度として，Goldberg（1972）により開発されたGHQ精神健康調査票（General Health Questionnaire；以下GHQ）をもとに作成された12項目版のGHQ-12（Iwata, 1988；新納・森，2001）を0～3点のLikert法で用いた。合計得点が低いほど精神的健康度が高くなっている。また，「不安・抑うつ」「活動障害」の2つの下位因子（各6項目）をもっている。

④気分と感情

坂野（1994）の気分調査票より「緊張と興奮」「爽快感」「疲労感」「不安感」「抑うつ感」の5因子を回答者への負担を考慮し，負荷量の高いものから各4項目の20項目，寺崎（1992）の多面的感情状態尺度より「活動的快」「親和」「非活動的快」「集中」の4因子を気分調査票と同様，回答者への負担を考慮し，負荷量の高いものから各4項目の16項目をそれぞれ4件法で用いた。

⑤その他

日常的ストレス感・主観的幸福感・生活満足度を7件法で各1項目回答してもらった。

⑥個人属性

a. 年齢，b. 性別，c. 職業，d. ファン暦，e. フ

ァンの友人状況, f. コンサート参加状況, g. 同行者の有無, h. 同行者の種別を回答してもらった。f. コンサート参加状況については, コンサートが2日間実施されたため, 参加・不参加だけでなく, どの日程で参加したのか, 1日のみなのか2日間なのかについても回答してもらった。

③～⑤については, 3時点それぞれで回答してもらい, ⑥については, 第一調査時も含めて4回の調査の中でわけて回答してもらった。なお, 本研究においては③⑥のみを対象としている。

結果

最初に, 参加者・不参加者の男女比については有意差がみられた ($\chi^2(1) = 4.71, p < .05$) ため, 3時点それぞれの精神的健康度の各項目合計得点に対して 2×2 要因の分散分析を実施した。その結果, 交互作用および性別の主効果に

有意差はみられなかったため, 以降の分析はすべて男女込みで行った。

コンサートへの参加・不参加が精神的健康度へどのような影響を与えたのかを検証するため, 参加の有無を独立変数として, 第1回目から第3回目の3時点の各尺度項目合計得点を従属変数として, 反復測定モデルの分散分析を行った (Table 1, Figure 1～3)。その結果, 参加者群と不参加者群の3時点での変化量については, 精神的健康度合計得点 ($F(1, 84) = 6.34, p < .05$) と不安・抑うつ因子 ($F(1, 84) = 8.35, p < .001$) に有意差がみられ, 参加・不参加の主効果については, 精神的健康度合計得点 ($F(1, 84) = 4.88, p < .05$) と活動障害因子 ($F(1, 84) = 4.51, p < .05$) に有意差, 不安・抑うつ因子に有意傾向差 ($F(1, 84) = 3.20, p < .10$) があり, 参加者群の得点が低かった。また, 各時点での参加・不参加の差異は, 多重比較の結果, 全ての変数で第2回目のみ1%水準で有意差がみら

Table 1 参加・不参加別精神的健康度項目合計得点平均値及び分散分析結果

	第1回		第2回		第3回		F値	
	不参加	参加	不参加	参加	不参加	参加	反復測定結果	参加・不参加の主効果
精神的健康度合計	15.44 (6.97)	13.87 (5.68)	14.26 (6.91)	10.17 (4.84)	14.74 (6.32)	12.88 (5.48)	6.34 *	4.88 *
不安・抑うつ因子	8.68 (4.04)	8.21 (3.54)	8.32 (4.98)	5.73 (3.50)	8.35 (4.19)	7.33 (3.68)	8.35 **	3.20 †
活動障害因子	6.76 (3.80)	5.65 (3.21)	5.94 (2.88)	4.44 (2.35)	6.38 (2.89)	5.56 (2.70)	1.08	4.51 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ () 内はSD

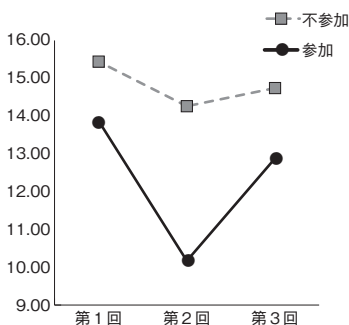


Figure 1 精神的健康度合計得点平均値推移

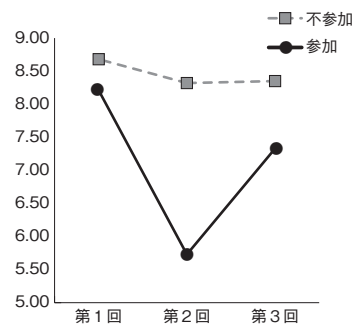


Figure 2 不安・抑うつ因子項目合計得点平均値推移

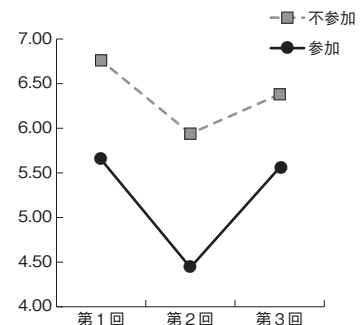


Figure 3 活動障害因子項目合計得点平均値推移

れ、明らかに参加者群の得点が低かった。これらのことから、参加者のみに精神的健康度の変化がみられ、特に直後は精神的健康度が改善されることが示された。

次に、コンサートが2日間実施されたことから、参加頻度の違いのある1日のみ参加者と2日間参加者で影響が異なるかどうかを検証した。不参加者群(34名, 以下不参加群)、1日のみ参加者群(24名, 以下1日群)、2日間参加者群(28名, 以下2日群)の参加頻度を独立変数とし、同様に、第1回目から第3回目の3時点の各尺度項目合計得点を従属変数として、反復測定モデルの分散分析を行った(Table 2, Figure 4~6)。その結果、参加頻度別の3時点での変化量、参加頻度の主効果については、参加・不参加別と同様な結果が得られたが、多重比較(LSD法)の結果、各時点での得点に差異のあることが明らかになった。

第1回目の時点においては、不参加群と1日群の間に精神健康度合計得点に有意傾向差、活動障害因子に5%水準で有意差がみられ、1日群が不参加群に比べて得点が低い傾向にあった。

コンサート直後である第2回目の時点では、不参加群に対して参加群である1日群、2日群ともに得点は低かったが、1日群が、全ての変数において不参加群>1日群が1%水準で有意だったのに対し、2日群は、精神的健康度合計得点と不安・抑うつ因子において5%水準で有意差がみられるものの、活動障害因子においては不参加群に対し有意差がみられなかった。

また、第3回目の時点においては、精神健康度合計得点では不参加群>1日群、2日群>1日群に5%水準で有意差、不安・抑うつ因子では不参加群>1日群に5%水準で有意差、2日群>1日群で有意傾向差、活動障害因子では不参加群>1日群に5%水準で有意差がみられ、不参加群に対してだけではなく、2日群に比べても1日群が得点の低い傾向が明らかになった。

一方、精神健康度の変化量に着目してみると、第1回目及び第3回目において1日群と2日群に差異がみられるのに対し第2回目の時点においては有意差がみられないことから、2日

群はコンサート直後の時点では改善度が高いことが考えられ、参加頻度を独立変数とし、第1回目と第2回目の得点差を従属変数として分散分析を行った(Table 3, Figure 7)。その結果、精神健康度合計得点($F(2, 93) = 3.73, p < .05$)、不安・抑うつ因子($F(2, 93) = 5.52, p < .01$)では有意差がみられ、活動障害因子では差がみられなかった。また、多重比較(LSD法)の結果では、1日群と2日群の間では有意差がみられなかったものの、不参加群に対して2日群の方が有意に得点差が大きかった。

これらの結果から、参加することだけではなく、参加頻度の状況が、精神的健康度に異なる影響を与えていることが示唆された。

考察

本研究においては、ファンを対象にコンサートに行くことが精神的健康度にどのような影響を与えるのかについて検証を行った。参加・不参加の要因においては、参加者のみに精神的健康度の変化がみられた。ファンは、コンサートに参加することで「元気になる」と表現することがあるが、コンサートを観に行くという行動が精神的健康の改善の一助となる可能性が示唆されたと考える。

しかしながら、参加頻度という要因が与える影響について検証した結果、1日のみ参加者と2日間参加者で異なっていることが明らかになった。まず、1日のみ参加者群は、不参加者群に比べて、コンサート直後の第2回目だけではなく、第1回目、第3回目の時点でも得点が低かった。これらは、Hullが示唆しているような持続効果、あるいは、原田が述べているファンの消費活動の「期待」や「追想」にみられるように、コンサートに参加するという行動においても、コンサート直後だけではなく、その前後にも持続的に影響を及ぼしている可能性が示唆されたと考える。一方、2日間参加者群は、そのような傾向はみられず、活動障害因子においては、第2回目時点において不参加群との間に有意差さえ確認できなかった。活動障害因子は、「日常生活を楽しく送れているか」等の項目であり、楽しかった出来事の直後だったにも関わらず、そのような結果になったことは、終わ

Table 2 参加頻度別精神的健康度項目合計得点平均値及び分散分析結果

	第1回			第2回			第3回			F値	
	不参加	1日	2日	不参加	1日	2日	不参加	1日	2日	反復測定結果	参加・不参加の主効果
精神的健康度合計	15.44 (6.97)	12.46 (4.35)	15.07 (6.44)	14.26 (6.91)	9.33 (3.75)	10.89 (5.58)	14.74 (6.32)	11.17 (4.92)	14.36 (5.59)	3.82 *	4.00 *
不安・抑うつ因子	8.68 (4.04)	7.54 (2.87)	8.79 (3.99)	8.32 (4.98)	5.38 (3.28)	6.04 (3.71)	8.35 (4.19)	6.29 (3.43)	8.21 (3.72)	4.85 **	2.51 †
活動障害因子	6.76 (3.80)	4.92 (2.96)	6.29 (3.33)	5.94 (2.88)	3.96 (1.78)	4.86 (2.70)	6.38 (2.89)	4.88 (2.44)	6.14 (2.81)	0.75	3.85 *

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$ ()内はSD

ってしまった喪失感の方が強かった可能性もあるだろう。

この1日参加者群と2日間参加者群の差異については、コンサートが2日間開催され、「両日ともに行きたいと思う人」という特性が影響を与えているのではないかと考える。単にファンの度合いが高く1日でも多く接したい、つまり、ファンの度合いが高いことが精神的健康度に影響を与えている可能性、日常的なストレス感が強くストレスの発散を必要としている人ほどその対象を求めている可能性、あるいはパーソナリティ特性そのものがファンのタイプに影響を与えている可能性もあるだろう。けれども、現時点では推測にすぎないため、今後は、様々な要因として捉えることが必要だと考える。

ただし、変化量に着目した結果、2日間参加群は、第1回目時点で得点が高い分、変化量も大きく、特に、不安・抑うつ因子については、大きな変化がみられ、精神的健康度の改善には貢献するものと思われる。本研究においては、参加者群・不参加者群等の群分けに際し調査対象者の自発的な調査への参加協力であることから統制されたものではないことと、今回はコンサートという特別な出来事を対象にしているため、統制された環境下において、日常的に接することができる音楽を聴く、映像をみるなどの行動を対象にした研究を行うことの必要性もあると考える。

また、本研究では、音楽ファンだけが対象となっており、さらに、音楽ファンでも一部のファンを取り上げたに過ぎず、余暇活動としても

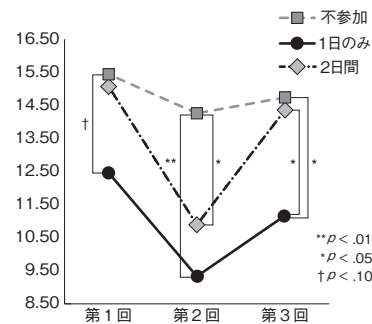


Figure 4 参加頻度別精神健康度合計得点平均値推移

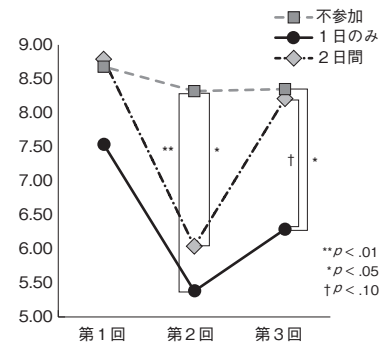


Figure 5 参加頻度別不安抑うつ因子項目合計得点平均値推移

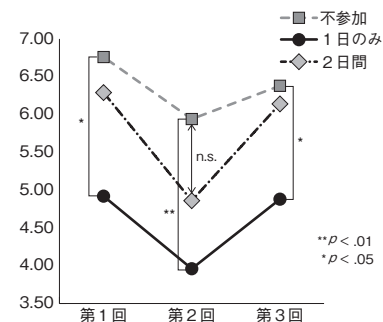


Figure 6 参加頻度別活動障害因子項目合計得点平均値推移

Table 3 参加頻度別第1回目-第2回目得点差平均値及び分散分析結果

	不参加 n = 39	1日参加 n = 26	2日参加 n = 29	F値
精神的健康度合計	1.10 (3.95)	3.31 (4.91)	4.24 (5.90)	3.73 *
不安・抑うつ因子	0.38 (2.66)	2.31 (3.00)	2.72 (3.72)	5.52 **
活動障害因子	0.72 (2.45)	1.00 (2.81)	1.52 (3.08)	0.70

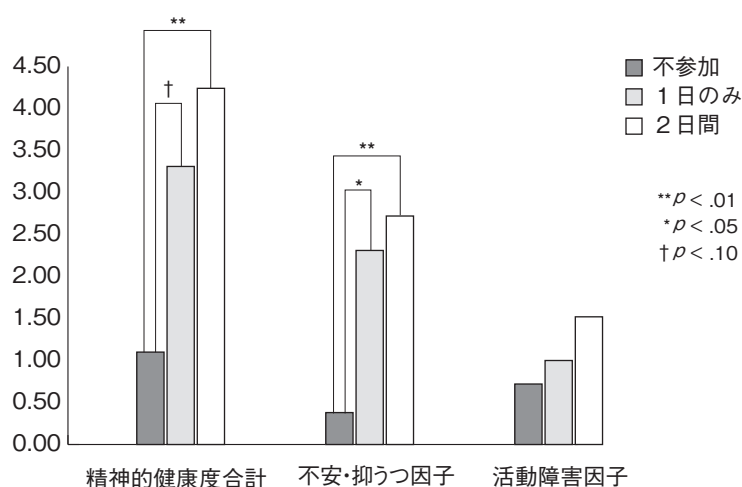
** $p < .01$, * $p < .05$, () 内はSD

Figure 7 参加頻度別精神的健康度得点差多重比較結果

一部の活動でしかない。しかし、本研究の結果は、「ファン」は自分の好きなことを見つけること、好きなことに夢中になることといった余暇活動や生きがいを持っており、それが精神的健康にポジティブな影響を与えることを示唆することができたと考える。今後は、スポーツファン等も含め、他のファンの対象や余暇活動へと調査対象を広げて検証する必要があるだろう。また、ファンは、一時点の事象に過ぎないコンサートだけではなく、ファンの活動として日常的に時間や労力を費やしていると考えられ、ファンであることが生活全体へもたらす影響、生活満足度や生活充実感、幸福感等の心理的 well-being としての概念を含めた構造を考えることが今後必要だと思われ、今後の課題としたい。

【引用文献】

- Goldberg, D. P. (1972). The detection of psychiatric illness by questionnaire: *A technique for the identification and assessment of non-psychotic psychiatric illness.*: Oxford university. Press. pp.156.
- 原田宗彦 (2002). スポーツファンの消費行動 プシコ, 3 (12), 16-21.
- Hull, R.B., IV (1991). Mood as a product of leisure : Causes and consequences. In B.L.Driver, P.J. Brown and G.L.Peterson (Eds), *Benefits of leisure*. State College PA: Venture Publishing, Inc. 249-262.
- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 64, 115-122.

- Iwata, N., Okuyama, Y., Kawakami, Y., Saito, K. (1988). The Twelve-Item General Health Questionnaire Among Japanese Workers. *Environmental science*, Hokkaido University, 11 (1), 1-10.
- 川口貞親・豊増功次・吉田典子・鶴川晃・植本雅治 (2002). 管理職として勤務する看護婦の職業性ストレスと余暇 産業衛生学雑誌, 44, 668.
- 小城英子 (2002). ファン心理の探索的研究 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 57, 41-59.
- 小城英子 (2004). ファン心理の構造 (1) ファン心理とファン行動の分類 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 61, 191-205.
- 松田恵示 (1997). スポーツのファン体験と共同体の身体性 中間集団としてのスポーツファン 杉本厚夫 (編) スポーツファンの社会学 世界思想社, 191-210.
- 松井豊 (2002). ファンにみる現代人の心理—自分自身を大切にしたいという想い プシコ, 3 (12), 10-15.
- 南博 (1957), 体系社会心理学 光文社
- 水口禮治 (1992). 「大衆」の社会心理学—非組織社会の人間行動— ブレーン出版
- 坂本真士 (1993). 没入尺度作成の試み 日本社会心理学会第34回発表論文集, 294-297.
- 坂野雄二 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討 心身医学, 34, 629-636.
- Searle, M.S. & Brayley, R.E. (1993). *Leisure services in Canada*. State College, PA: Venture Publishing, Inc.
- 瀬沼勝彦 (2005). 余暇の動向と可能性 学文社
- 社会経済生産性本部 (2005). レジャー白書2005—特別レポート—インバウンド 日本の魅力再生 社会経済生産性本部, 1-28.
- 新納美美・森俊夫 (2001). 企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12) の信頼性と妥当性の検討 精神医学, 43, 431-436.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, 62, 350-356.

【脚注】

- 1) 本研究は、2007年度修士論文のデータを用い、再分析・再構成したものである。

Effect on going to a Concert in the Fan of Music to Mental Health

—A Study of the Influence Participating Frequency—

Chitose Nishikawa Mejiro University, Graduate School of Psychology
Shozo Shibuya Mejiro University Faculty of Studies on Contemporary
 Society

Mejiro Journal of Psychology, 2011 vol.7

【Abstract】

The purpose of this study is to verify an effect of mental health accord to going to a concert in the fan of music. I verify which exert an effect on mental health by the type of participating-nonparticipation and participating frequency. Furthermore, I examine the relationship of the variable at the 3 time of pre/post/post-post of a concert. There were 86 subjects who replied to all term. As a result, which they go to a concert had a positive effect in mental health. And, participating frequency was different also in the participant, and the group of one-day participation was in the better condition. In the future, further studies on the relationship of not only a concert which is an occurrence in a point temporarily but their daily fan behavior and psychological well-being, and verification which expanded the subjects of different fans or the objects of the leisure-time activity will be required.

keywords : fan, mental health, leisure, concert, discretionary time